

近代詩鑑賞辭典

吉田精一
分銅惇作 編／東京

近代詩鑑賞辞典

昭和44年 9 月 5 日 初版印刷

昭和44年 9 月15日 初版発行

定価 1200 円

編 者	吉 ^{よし} 分 ^{ぶん}	田 ^だ 銅 ^{どう}	精 ^{せい} 惇 ^{じゆん}	一 ^{いち} 作 ^{さく}
発行者	岩	出	貞	夫
印刷者	澤	村	嘉	一

発行所 株式会社 東 京 堂 出 版

東京都千代田区神田錦町3-5
電話東京(291)8226・振替東京270

序

「近代詩鑑賞辞典」は明治以降今日に至る代表的詩人の名作をえらび、近代詩を専攻する、新進有能の研究者諸君にそれぞれ得意とするところを分担して執筆してもらった。収録作品は教科書類にも多く採られているポピュラなものをあまさないが、またさほど一般的でなくても、価値的に見てひろうべきものはひろったつもりである。

主旨としてはなるべく多くの詩人と、多くの作品について懇切にして要領を得た解説・鑑賞を加えることを期した。

文学作品はすべてそうであるが、詩歌にいたってはとくに、ことばの意味を注解しただけでは足りない。詩篇としての面白さがどこにあるかを味いとはじめて理解したといえるのである。鑑賞なくして、詩歌の作品はないといってもよい。

しかも近代詩百年の歴史は、きわめて早足であって変化に富み、明治と大正と昭和と、そして戦後とでは、同一の範疇に入れて論じまた味うことができないほどの変りようである。

本書はその何れのジャンル、何れの時代の作品についても、それを如何なる見地から味えば、もっとも正しく理解し得るかという視点を設定し、できるだけ客観的に味解・評価しようとしてとめている。と

くに抽象的、理論的に説を立てていないが、個々の作品に即して具象的に、詩の解釈法を教えているともいえるであろう。

もとより鑑賞は個々人のものであって、素質、経歴によって、味い方に深淺は自ずから生じ、平均的な普遍妥当性は要請し得ない。それにしても本書は、このような詩は、このように味うべし、という一ツのテーゼを示し、読者の読み方を啓発していると信じる。

本書を編むに際しては、分銅惇作氏にとくに配慮を煩わし、分銅君及び三浦仁、飛高隆夫、安藤靖彦の諸君の執筆を乞うて、功を収めることができたのである。諸君の努力によって、大方に推挙するに足る鑑賞辞典ができたことはよろこばしい。

一九六九年八月

吉 田 精 一

凡 例

- ▽本書は、明治・大正・昭和の三代にわたる日本近代詩史から主要な詩人七五名、それぞれの代表的作品一六八編を選んで、各作品に鑑賞を施すことを主眼とした。
- ▽項目は、各詩人を五十音順に配列し、一詩人で二作品以上収載した場合は制作年代順に掲げて構成した。
- ▽各詩人の略歴は、項目の初めに解説し、次に作品を掲げて、「鑑賞」で詳細な解説・鑑賞を施した。
- ▽作品の末尾には詩集名を付したが、同一詩集から二作品以上収載されている場合は、詩集の解説は初めの作品において試みることを原則とした。
- ▽巻頭に日本近代詩の流れを概観することができるよう、「現代詩の展望」を置き、巻末に文献一覧、索引を付した。索引は「人名索引」「作品・事項索引」に分けた。

用語・符号

- ▽引用詩・引用文は、原則として原文のままにした。ただし難解な語句には必要に応じてルビをつけた。
- ▽詩集・研究書などには「」を、詩作品・研究論文・雑誌名・新聞名などには「」をつけて区別した。

▽作品の発表年月、雑誌の発行年月などに、明・大・昭とあるのは、それぞれ明治・大正・昭和の略である。たとえば、(大正一〇・一二)は大正一〇年一二月を示す。

編集者・執筆者

- ▽編集は吉田精一・分銅惇作があたり、執筆者として他に安藤靖彦・飛高隆夫・三浦仁の三名が参加した。
- ▽各項目の執筆は、末尾にそれぞれの執筆者名を記入した。

目 次

序 文	前 付 一
凡 例	前 付 三
概 説	前 付 五
本 文	一
文献一覧	五一九
執筆者略歴	五三七
索引	五六四
	(ページ)

概 説

近代詩の発展

明治百年、そして近代詩は八五年の歴史をもつ。「新体詩抄」(明二五、一八三)が、たとい翻訳を主としたとはいえ、西洋の風に模倣して、日本にそれまでなかった新しいジャンルを創り出そうとした意図と、目的は買うべきで、その意義は大きい。形においては、七五・五七の伝統的な声調に従い、似たものに和歌の長歌体があったとはいえ、新体詩は明らかにそのような伝統を否定し、伝統と断絶して新しい詩の様式をおこそうとした。のちの近代詩が、できるだけ和歌・俳句と無縁なあたりに道をさぐり、少なくともそれを創作意識の中からしめだした事情は、出発時にはつきり措定されていたのである。

詩の芸術的定着

近代詩の第一次芸術的定着は、島崎藤村の『若菜集』

(明三〇)によると見ていいだろう。一つの完成したスタイルを得るまでの、一五年の月日は長くはない。その間に多くの試作と錯迷とが行なわれ、多くの詩人が功成らずして消えて行った。そのうちの一人に北村透谷を数えうる。透谷は「蓬萊曲」で、藤村の劇詩「琵琶法師」や「茶の煙」をはるかにこえる内面的な劇を構成した。しかしそれも眼高手低の失敗作だった。彼の短詩は、一編の「眠れる蝶」を除けば完璧の作はなく、ふつつかで生硬であり、情熱の沸騰はあったが、ともかく近代日本の叙情の新声だった。

叙情詩と叙事詩

新しい時代の草創期には叙事詩があらわれるものだが、近代日本にはそれがなかったと、いう論者がいる。それは明治の詩を知らないものである。藤村にもできれば別として、叙情的な叙事詩がないことはない。彼と一時並称された土井晩翠となると、純然たる叙事詩人であり、男性的な「雄弁詩人」の面目を発揮した。英雄叙事詩(「星落秋風五丈原」のごとき)は、漢詩書きおろし体とはいいいえ、日本の詩史にかつてないところみであった。漢詩に若干の先例があっても、これほど長大のものはなかった。

この種の史詩・譚詩は、与謝野鉄幹(寛)・薄田泣菫・蒲原有明・伊良子清白・岩野泡鳴ら、明治三〇年代の詩人によって継承・発展された。明治四〇年代初めにかけての

一〇年間は、浪漫的な叙情精神が花ひらいた時期であり、同時に直叙体長編叙事詩の雄編力作がぞくぞくと創造された時代であつた。

詩集にしていえば藤村の『落梅集』(明三)、晚翠の『天地有情』(明三)、鉄幹の『紫』(明三)、毒草(明三)、清白の『孔雀船』、泣菫の『白羊宮』(同)、有明の『春鳥集』(明三)、『有明集』(明三)、泡鳴の『闇の盃盤』(同)などは、詩史上の記念碑的な業績であつた。優婉なやまとことばと、洗練された漢語とを自由に駆使した文語調の定型詩は、一応この時期に頂点に達した。浪漫的古典詩、あるいは古典的浪漫詩の時代はここにとどめをさすのである。

象徴詩の移入

蒲原有明の『春鳥集』『有明集』は象徴詩集であり、ヨーロッパで一九世紀末に完成した象徴詩の日本での第一声であつた。そして有明の詩業とはば雁行しつつ、上田敏によるフランス象徴詩の移入が行なわれた。『海潮音』(明三)がそれである。有明の象徴詩はイギリスの詩人ロゼッティから自得したもので、それが生来の宗教的、精神的な資質と相応じて、本邦にかつてない幽渺な觀念象徴の詩風を開拓することになった。彼は微妙な感覚・神経を生かすべく、新しい律格についても苦心し、三・三、四・三、五・四、三・四などの新風をも編み出した。

上田敏の象徴詩理解も有明と同様に觀念象徴に傾斜したものであつて、まだ情調象徴に及んでいない。しかしともかく彼は難解なマラルメをはじめて日本に伝え、その象徴理論について簡単な解説するところがあつた。それが近代象徴詩の何ものかを開く唯一のキイだった。

自由詩の発生

自然主義の形式否定・実感尊重は詩の分野にも大きい影響をもつて臨んできた。小説の方面での散文精神の徹底は、自然主義の表裏の一であつたが、直接には詩形としての口語自由詩や、口語的、散文的発想へのみちをひらいた。川路柳虹らの稚拙な口語詩はともかくとして、石川啄木の「呼子と口笛」その他の晩年の詩風は、文語自由詩の形式ではあつても口語的発想である。明治期には口語詩として充実した詩作はほとんど絶無に近いが、文語自由詩には見るべきものが多かった。北原白秋・木下李太郎・高村光太郎・三木露風らがその作家である。

白秋は象徴詩集『邪宗門』(明三)に出発し、『思ひ出』(明四)に歌謡・民謡と詩の中間を行く、一般の親しみやすい感覚ゆたかな新詩境をひらいた。露風は叙情詩集『廃園』(明三)に才質のひらめきを見せ、『白き手の獵人』(大三)で、東洋ふうの象徴詩を建立して、白秋とならび称された。

高村光太郎は思想的な厚味をもち、ほりの深い彫刻的な詩風を展開した。漢語を多用しつつ、理性と意志によって生命の力を追求しようとの意図を『道程』(大三)に盛り上げた。この詩精神は彼をヒューマニズムの旗手とし、大正詩境の一中枢たる民衆派の詩人群に近づかせた。

民衆派の詩人たち

自然主義ののちに、理想主義集団としての「白樺」が散文壇にあらわれたが、詩の面でそれと対応するのは、福士幸次郎を先達とし、白鳥省吾・山村暮鳥・千家元麿・百田宗治・室生犀星・尾崎喜八らを包摂する一団の詩人たちである。彼らを中心に詩話会が結成(大五)され、機関誌「日本詩人」が発刊(大二)された。民衆派の詩運動によって、自由で平明な用語の主張から、当然詩体は口語自由詩にかぎられ、明るく健康な生活や思想が好んで歌われることになった。

千家は「白樺」出身で、単純素朴な体験を詩化し、子供のよう清純なところをそのまま歌いえた特殊人であった。尾崎もまた「白樺」から出、純粹で明るい肯定的精神に生きた。山村はイマジスチックなヴィジョンの詩人だったが、やがて人道主義方向に転換した。彼と室生・萩原は同胞詩人ともいうべく、たがいにみとめあって詩雑誌「感情」を創刊(大五)した。室生はきわめてはげしい野性的

な叙情を生涯を通じてはなさないが、民衆派と歩調を合わせる一時期をもったのである。

民衆派の詩運動は、当然出るべくして出たものであり、詩を民衆に近づけ、詩材に人生的な内容をゆたかにしたことは、その大きい功績であった。その半面、詩を散文化した、冗漫で無感覚な技術上の欠陥は責められてよい。そして民衆派の基盤をなした民主主義・人道主義は、ホイットマン、ドストエフスキなどの超階級的、汎人類的なものであったから、やがて第一次ヨーロッパ大戦後の階級対立が激化し、社会主義・アナキズム・コンミュニズムなどが強力になるに従って、その思想的地盤は分裂した。大正一五年(元六)詩話会は解散し、「日本詩人」も終刊した。

反民衆派の詩人群

この時代に比較的少数であったが、自己の個性をまもり、高踏的、もしくは唯美的詩境に生きた詩人たちがあつた。北原白秋・萩原朔太郎・大手拓次・日夏歌之介・西条八十・佐藤春夫・堀口大学らである。白秋は『水墨集』(大二)で、在来の官能的な境界から東洋的象徴の域にふみ入ろうとつとめ、西条は『砂金』(大六)に童謡ふうの幻想を夢み、日夏は『転身の頌』(大六)にゴシック・ロマン体と称する高踏派の堂塔を建立した。佐藤は失恋詩を中心とする古典的感傷を『殉情詩集』(大二)にもらし、堀

口は『月光とビエロ』(大〇)に泣き笑いの知性をひそめた。このほか蝶のように明るい『華やかな散歩』(大二)をこころみた佐藤惣之助などの影響から出発した、『春と修羅』(大三)の宮沢賢治の存在も、独自の幻想と語彙によって、特殊な光彩を放っている。

口語自由詩の完成

しかし藤村以来の近代詩をもっとも大きい曲り角に立たせたのは、萩原朔太郎の『月に吠える』(大〇)である。第二詩集の『青猫』(大二三)とともに、それ以前の詩想および表現に深刻な變動をあたえたことはいなめない。彼は異常な感覚をもって、オリジナルなメタフィジックの世界にわけ入り、その液体化した思想を、洗練した詩語にのせた。純粹な口語によって、自由詩と(象徴詩とを)一致せしめたこと、ことばの機能を意味論的に操作し、新しい詩語の用い方を発見したことは、彼の功績である。

これらの詩集にふくまれているアナキスチックな情思や、社会・人生に対する絶望感は、よりナマなそして生硬で拮据な文語調によって『氷島』(昭九)にうち出され、前の二詩集が影響したのとは違った、より新しい世代に深い感化を及ぼした。

ダダイズムとアナキズム

第一次ヨーロッパ大戦前後の前衛芸術であった、ダダイズムや未来派・立体派の詩運動は、わが詩壇にも比較的早くから波及し、神原泰・平戸廉吉などによって、在来の詩形式に反抗する表記法や、素材をしがえて登場した。それらはニヒリズムとベシミズムに裏うちされた、近代生活に対する反逆の産物である。高橋新吉・萩原恭次郎らによってこの方向は推進され、萩原は『死刑宣告』(大二四)を出して、方向づけられない憤怒と、不安と焦燥とから、既存存在のいっさいを否定し、破壊のための破壊を絶叫した。

この無方向に反して、歴史的使命を自覚した無産階級の意識に立って、否定の奥に建設の希望をかけたのが、プロレタリア文学の一環としてのプロレタリアの詩運動にほかならない。

プロレタリア詩運動

プロレタリア詩人には、根岸正古・伊藤公敦の『どん底で歌ふ』(大九)などを先驅とし、中野重治・森山啓・壺井繁治・小野十三郎・西沢隆二・遠地輝武・林芙美子・松田解子らを数えうる。壺井・小野はアナキズムから転進し、林には、終始アナキスチックなおいが強い。このうちもっともすぐれた作品をのこしたのは一冊の『中野重治詩集』(昭二)の中野である。彼の詩は少ないが、この

派の詩に多い怒号・罵声のぶっつけな表現や、ヒステリックな感情の叫びとはちがって、よくえらばれたことばが用いられ、するどい感覚と強烈な正義観とがマッチしている。なお前衛の闘士の立場に立って、直接に闘争の場面をうたった詩は社会民主主義的な詩人達より、マルクス主義左翼の「戦旗」派の詩に多いが、この種のものには案外に佳作が生まれていない。量的にはともかく、質的にはプロレタリアの詩は一般に詩的技術に無関心で、「詩」になっていない。佳作はむしろ運動が抑圧されてのち生まれた抵抗詩に見られる。

モダーニズムの「詩と詩論」

詩法・詩技術は昭和初頭の「詩と詩論」(昭三六)の運動によって一変するが、それに先だって堀口大学の訳詩集『月下の一群』(大二)があつて、近代フランス詩を象徴派からシュールレアリスムのもつとも新しい傾向にいたるまで網羅して訳出した。フランス訳詩集としては、早く永井荷風の『珊瑚集』(大三)があり、自己の趣味にあった類唐歌美的な詩のみをたくみに訳出して、同時代の詩人たちに影響をあたえた。しかし堀口のほうがはるかに幅が広く、また新鮮な感覚詩や知的な「針金細工で詩を作る」シュールレアリスムの同時代の詩風の移入を果たして、以後の日本文の着るべき新しい衣装を、展覧して見せたおもむき

があつた。

「詩と詩論」は安西冬衛・北川冬彦・竹中郁・春山行夫・三好達治らを同人とし、のちに佐藤一英・滝口修造・西脇順三郎・吉田一穂らを加えた。ここでは叙情詩を否定し、主知的な詩の構成を中心とする詩論・詩法の改革の主張と超現実的な詩作の実践とが行なわれた。わけても西脇順三郎は詩からリアルな意味をうばい、イマージュの世界を造型することを新しい志向としてうち出した。生理的、自然発生的な詩からの抽象主義による脱却が、彼の念願であつた。『あなばるわりあ』(昭五)は世人をおどろかせた彼の最初の詩業であつた。

北川冬彦は新散文詩運動とシュールレアリスムの一致を説き、『三半規管喪失』(大二四)などに、凝縮した直観と感覚によって独自の短詩形を構成したが、しだいにイデオロジカルな方向に向きをかえ、『戦争』(昭四)で軍国主義批判を行なつた。この結果、彼は一面には知性の遊びの観のある「詩と詩論」の本部からぬけ出し、「詩・現実」(昭五)を創刊した。

三好達治は北川と行動をともししたが、彼は北川とは異質の詩人で、室生・萩原の影響のもとに出発し、感傷的で清朗なりリズムにうるおう詩風を開いた。彼には最初から伝統のかけが濃く、第一詩集『測量船』(昭五)の特色は、「詩と詩論」の詩人たちのようなたんなる意匠なことばの

裝飾をこえて、感性^{センス}による現実把握をこころみたところにある。「詩と詩論」は昭和七年「文学」と改題し、ここに村野四郎・田中克巳・津村信夫らが拠った。村野の『体操詩集』(昭二)はダイナミックなものを主題にしつつ、イマジスムの手法を実感で肉づけ、新鮮であった。

四季」と新しい叙情詩運動

昭和八、九年(一九三三—三四)の前後は、プロレタリア文学の退潮をうけて新しい文学運動や雑誌がおこったが、詩壇でも吉田一穂・佐藤一英・大木惇夫らの「新詩論」(昭七)や、堀辰雄編集の「四季」(昭八)が出た。「四季」はいったん二冊で中止したが、翌年再出版をし、堀・三好・丸山薫の編集で、同人に萩原・室生・竹中・立原道造・津村・阪本越郎・神保光太郎らをあつめ、のちに伊東静雄・田中冬二・蔵原伸二郎・大木実などを加えて、昭和一九年までつづいた。

この雑誌は古典復興の時代気運に応じて、いくぶんとも古典的な志向を示し、知性と感性の調和に立つ秩序ある叙情詩をきずき上げようとした。「詩と詩論」のモダニズムとは対離する、伝統への復帰のにおいがここには見られた。三好の詩あたりがその一つのメルクマールであり、彼はやがて、『艸千里』(昭二)『一点鐘』(昭六)などの詠嘆的な文語詩に転じていった。

丸山薫は『帆・ランブ・鷗』(昭七)でデビューした詩人で、現実生活にまつわる空想を造型して、心象風景や自己の情念を冷静に凝縮した。『山羊の歌』(昭八)の中原中也是、傷ついた孤独な魂の告白を民謡調のしらべに託してうたった。彼の詩の基調には生の倦怠をいたずらに囃む苦悩がながれている。天逝した立原道造は死の直前、第一回中原中也賞をうけたが、その詩は『蒼草に寄す』(昭三)以下数多くない。しかし繊細で都雅なソネットを、完成した形でのこした珍しい詩人である。津村信夫は立原より素朴な手法で、好んで信州の風物を詩材とした。「四季」の後に活躍した伊東静雄の『わが人に与ふる哀歌』(昭二)は萩原朔太郎から、その若さとリリズムが「地下に固く踏みつけられ、ねぢ曲られ、岩石の間に芽を吹こうとして、痛手に傷つき歪められた若さである」と評された。モラルを蒼白なリリズムに溶かした、思想的叙情詩人の面目が彼にはある。

「歷程」とその他の詩人たち

「歷程」(昭二)は草野心平を中心として、辺見猶吉・岡崎清一郎・尾形龜之助・菊岡久利らをあつめた。草野は漢語を多用する男性的な風格の詩人で、好んで「蛙」と「富士山」を主題として多くの詩を作った。草野のボヘミアンでエネルギーな両面を、この二つの主題がわけもつた

観がある。彼のしんは虚無的で、人間性の底にある、こんどんとしたものにつきあたるとき、その独特の風貌が光る。

八木重吉は『貧しき信徒』（昭三）の題名のように敬虔で病弱なキリスト教徒の詩人で、素朴な独白による、童心に近い純情を保持しつづけた。

抵抗詩と戦争詩

昭和一二年（九三）、日華事変の勃発とともに、自由主義は後退をよぎなくされ、時代はファシズムに傾斜して行った。一方では軍国主義に追隨して、皇軍讃美のしらべを奏する詩人たちも多かったが、少数の詩人は諷刺や逆説の仮面にかくれて、時代の方に抵抗しようとした。小熊秀雄・金子光晴・小野十三郎・岡本潤・菊岡久利らがそれである。

金子の『鯨』（昭二）は俗語や卑語を多用し、天皇制や軍国主義に対するしんらつな諷刺をばらまいた、すぐれた詩集であった。また小野は『大阪』（昭四）で、徴用によって荒廃した大阪の現実的風景を直視して、痛烈な批判を感ぜせしめた。

戦後の詩壇

戦争中の古典偏重・伝統尊重の情勢は、短詩形文学のうち、短歌・俳句に幸いたが、その反動としてこれらの伝

統詩型は、敗戦によって衝撃をうけ、また直接には俳句に對して放たれた桑原武夫の『第二芸術論』は、短歌にもあてはまるものとして、この両ジャンルの一時的低迷はまぬがれなかった。

それに対して詩は伝統的詩精神に満足しえない近代精神の表現様式として、戦争終結とともに時期を得た観があった。戦争中鳴をひそめていたプロレタリア詩人の復活は当然として、戦前戦中派の詩人たちと、戦後に輩出した詩人たちのかっばつなうごきは、かつてないほどの詩集の氾濫をもたらした。

戦後もっとも早くおこった新しい詩活動は昭和二二年の「荒地」によるそれである。これは戦後の現在を「荒地」と見て、荒廃した土壌における混乱を確認しつつ、新しい理想を求めようとしたものである。少なくとも日本文明の荒廃と、伝統の喪失による精神的不安の「荒地」から戦後詩は出発せねばならないとの意識は、その同人、鮎川信夫・田村隆一・三好豊一郎・木原孝一・黒田三郎・北村太郎・中桐雅夫たちに共通するものであった。

「われわれの荒地に対する愛とは、単に減びつつあるブルジョア文明に対する愛ではなく、とりもなおさず現代そのものに對する愛を意味する。それは文明の伝統の危機を招き、荒廃と狂気と不信に陥っている世界に耐えつつ、われわれを救う永続的価値をなんとかして見いだそうとする一

つの詩人の態度である。」（鮎川信夫、昭三・セ）

こうした実存的思想が多くの共感を呼んでから、朝鮮事変以後数年をへて社会状況もいささかおちついたのと応じるように、感情は内部に沈潜し、形而上的追求の精神が、戦後詩の主題となりはじめた。村野四郎のような既成詩人のめざましい活動とともに、山本太郎・谷川俊太郎・金井直らがあらわれた。さらに新しい超現実的な要求をふくむ新人として、大岡信・中村稔・中江俊夫らがあり、一部からは「実存的な関心も、社会的な関心ももたない詩人」（吉本隆明）のむれと評された。別に谷川雁・長谷川竜生・関根弘らは社会主義的傾向の新しい詩的形成を示している。

戦後の詩壇は今日なおじゅうぶんに整理される時期にきていない。戦後に出発して、ここに名をあげた以上に注目すべき業績をあげている詩人は他にも数少なくない。ここでは限られた紙数の中で、そのある一面にふれたにすぎないことを付記する。

（吉田 精一）

近代詩鑑賞辭典

鮎川信夫

あゆかわ のぶお

大正九

(一九二〇)

東京

市高田豊川町に生まれた。本名は上村隆一。早稲田中学、早稲田第一高等学院を経て、早稲田大学英文科に進んだ。昭和一二年中桐雅夫の「LUNA」(のち「LE・BAL」・「詩集」と改題)に加わる。一三年同人誌「荒地」を企画、翌年から二年間に六冊を出した。同人の多くは戦中・戦後、不幸な死を遂げた。この年また村野四郎・近藤東などの「新領土」にも参加した。一七年早大を中退、応召してスマトラなどで従軍。病を得て一九年帰国、福井県三方郡の傷夷軍人療養所で『戦中手記』を書いた。二二年、さきの「詩集」「荒地」のメンバーに木原孝一・黒田三郎などの「VOU」の同人を加えて詩誌「荒地」を創刊。同人には他に三好豊一郎・田村隆一などがいた。この「荒地」は六号で廃刊、のち二六年から『荒地詩集』を三三年まで六冊刊行、戦後詩推進の一中心となった。「集団とか組織というものは、大体、あまり責任を負わないものと相場がきまっています。芸術家は、そうしたものに自己の良心をあずけてしまつてはなりません。」(「詩人の社会的責任」というのがここにおける彼の立場であった。つまり主に戦中・戦後の精神的荒廃の中で人間良心の回復とそれにもとづく芸術的秩序の回復のことが問われている。詩集に『鮎川信夫詩集』(昭三)『橋上の人』(昭三)、他に『鮎川信夫詩論集』

(昭三)『現代詩作法』(昭三)、訳書にT・S・エリオット『詩の効用と批評の効用』(昭元)などがある。

▲神の兵士▼

死んだ兵士を生きかえらせることは

金の縁とりをした本のなかで

神の復活に出会うよりもたやすい

多くの兵士は

いくたびか死に

いくたびか生きかえってきた

(聖なる言葉や

永遠に受けることのない

不思議な報酬があるかぎりは——)

いくたびか死に

いくたびか生きかえる兵士たちが

これからも大陸に 海に

幾世紀もの列をつくつてつづくのだ

(永遠に受けることのない報酬は

無限の質だ!)

一九四四年五月のある夜……